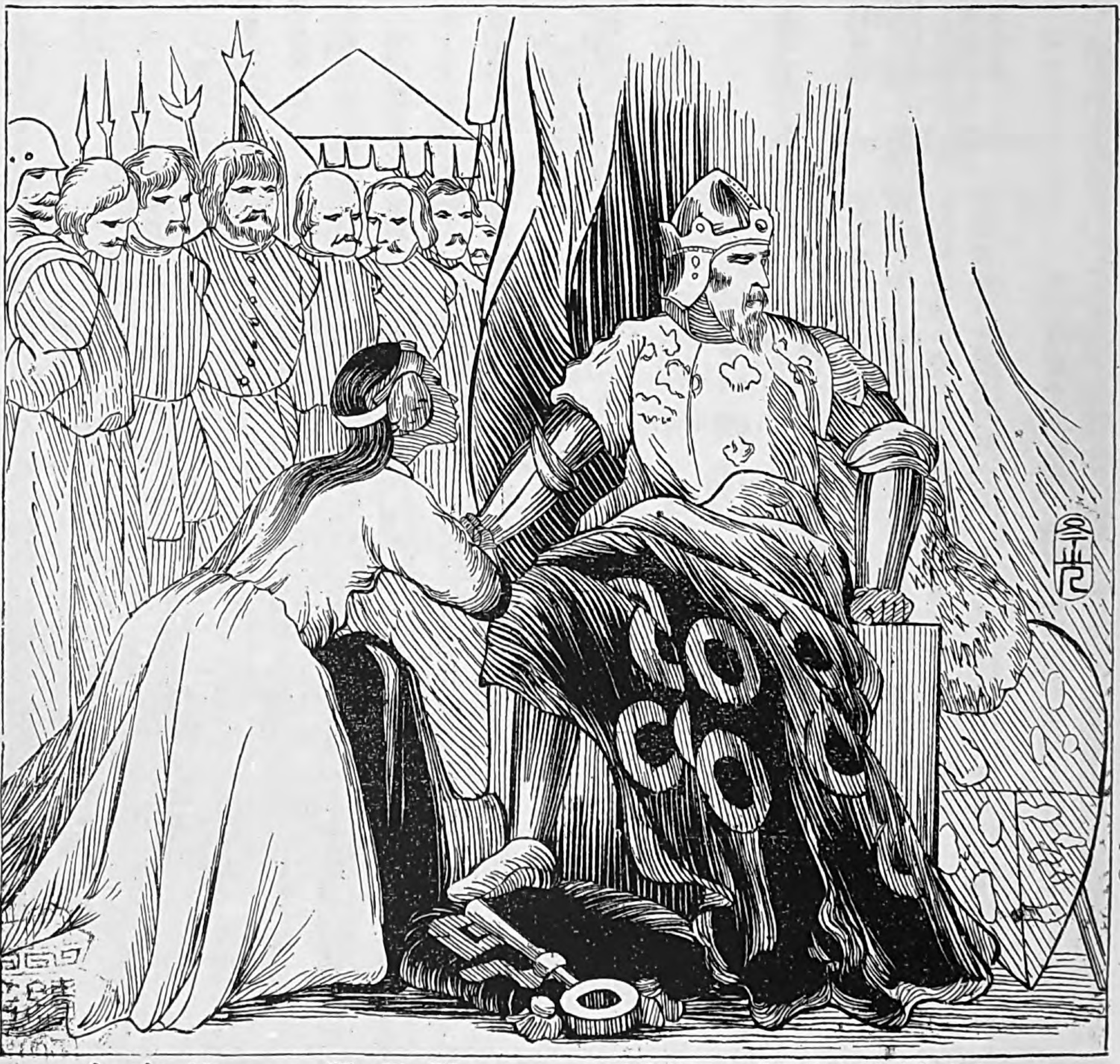
THE LADIES' JOURNAL OF EDUCATION.

女學雜誌

驛遞局認可　明治十九年六月十二日　毎土曜日發兌　第貳拾六號



の繪の説明ハ本紙中ニ在り

The Engraving illustrated in another page.

東京京橋區南鍋町貳丁目拾壹番地　發行所　績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第二十六號目次

●官報●女學叢誌○本を務むべし●中外新報十八件●學藝叢談○カリー氏幼兒敎育學○理學一斑●英語の栞〔附羅馬字話し〕●英王妃ヒリッパ〔表書傳〕○節婦阿辰○妙融尼の歌才○憔夫の妻が勇氣●和書講義○つれ〳〵草●稗史小説○英國小説剪燈情話第二回●女紅○裁縫○男物幷女物仕立揚寸法及び二尺巾折返男羽織裁方○日本訓理要具目錄○炭火の爆るを止る法○蠅を去る法○皮膚を白くそる法●御伽草○酒の上の取組合○考へもの二題●古今雜話○西洋女禮式一斑○床盃○日本女禮のあらまし起居進退の部つゞき○群芳詞苑○詩歌數件○數學答式○新題○廣告

明治十九年六月十二日

明治十九年 女學叢誌每土曜日發兌表

一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	自一行至十行	自十一行至二十行	自二十一行至三十行	自三十一行至五十行
壹回分	八錢	七錢	六錢	五錢五厘
二回分	七錢	六錢五厘	五錢五厘	五錢
三回分	六錢五厘	六錢	五錢	四錢五厘
四回分	五錢	四錢五厘	四錢	三錢五厘

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵稅壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區内郵稅不申請

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ雜誌配達不仕事に内規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵稅共郵便爲替又ハ通運便にて御送附わらんとを希ふ○郵券代用ハ御斷り申上候尤も一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割增を乞

郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替券を本舍へ御送附可被下候

但し東京十五區内ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎官報

本年五月廿五日

○文部省訓令第一號

北海道廳府縣

小學簡易科ハ左の要領に依り土地の情況を考へ其教則を定むべし

明治十九年五月二十五日　文部大臣　森　有禮

小學簡易科要領

一修業年限　三箇年以内たるべし○一學科　讀書作文習字算術○一學級　兒童六十人以下の場合に於てハ學級を分つとを得ず其他ハ尋常小學校ニ準ず○一授業時間　毎日二時より少からず三時より多らず但算術の授業時間ハ授業時間總數の半以上たるべし

○文部省令第八號

勅令第十四号小學校令第十二條に基き小學校の學科及其程度を定むること左の如し

明治十九年五月廿五日　文部大臣森　有禮

小學校の學科及其程度

第一條　尋常小學校の修業年限を四箇年とし高等小學校の修業年限を四箇年とす

（以下次号）

◎女學叢誌

○本を務むべし

總て女ハいうに優しきと固よりその美德と申すべけれども日本の婦人も有爲活潑の氣性に乏しとすこれ吾人の常に憂ふる所なるがさるにても餘りに有爲活潑に過てハまた及ばざるに如ざると往々にして之れあるなりされば進んで事をなすにハ前以てよく〳〵思ひ廻らしてその本を務むるこそわれ大早計にもの〻順序をも顧りみずしてその末にのみ走ることあらばなに事にまれ能くその功を奏することと覺束なし昨年のとなりき世に束髮會となん云へるもの起りて一時ハ猫も杓子も其毛髮を束ね行く所として頭らのみ洋風の婦人を見ざるハなく御不用の櫛笄買受所と云へる看板をさへ揭ぐるものあるに至りたりこの時吾人ハこの會の美擧たるを喜ぶと同時にまたその永續せざらん事を憂ひたりしが果せる哉不幸にも吾人の憂ひハその圖に當り今日に至りてハ僅かに一二女學校生徒の洗ひ髮の蓬頭を見に止りて市中の唐物店にヘヤピンありとの張り札も追々引剝その傾きありて嚮きに御不用品買受の看板を出したるものこそ目的を達したれこゝに於て世の謗

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

よも云へる如く進むに疾きものハ退くよもまた早しとハこの事なるかと世の守舊家の心の中に笑ハせたるぞ最と口惜しきことなりける從來根が下りしとか上りしとか鬢が出しとの引込みたりとかいと大切なる嶋田丸曲一葉返しを一朝に廢して彼の頭らのみの洋風を改まりたる有爲活潑の氣性ハ誠にさるべきことながら斯く速かに衰へたるその原因を考ふるに只々毛髮の末に止りてその本を務めざりしが故なるのみ

そもく日本婦人の有樣を見渡すに技藝もなければ學問もなくたゞ臺所の隅にて唐茄カボチャの煮燒の世話をなし夫の稼ぎ出したる金錢を何の思慮も工夫もなく右より左りに遣ひ拂ひ子を育つるにも教育の法を知らず只その保傅をなすに過ずして第一の職掌と云ふハ容儀を調へ男子の意に適はんとを勉むるのみされば女の容貌を作るハいと大切にして殊更ら頭も髮容とさへ云ふなるに束髮の儘あらはにてあらんは最と見苦し帽子を冠りたらんにハ日本服にてハまた見苦し西洋服にぞ改むべきさりてハ下駄にてハ倘は更らあし〱靴を穿きたらんにハ疊の上にてハ不便なり家をも改めて西洋造りとなさゞるを得ず日本の竈を据て西洋間を煙らそも餘りに心なきとなりけりストーヴを据えて煙筒を造るべしさればまた日々の食事も洋食となさゞるを得ざるに至るべしかくてハ遂に余輩の熱望する衣食住の改良をまでなすべき程の實力ありてこそ初めて束髮をも行ふべけれさるにても今の日本婦人の有樣にてハ能これをなし得るの力らわるや否これ余輩の束髮論を贊成すると同時にまた其行ハれざるを憂る所以なり

されバ徒ふに容儀の末にのみ心掛けずして(固より惡しき事にハあらざれども)まづ學問をなし技藝を學び腕に職業を覺え産業を興し男子と同位地に立たんことを勉め(男子の位置もまた甚た低くけれども)男子と共に力らを合ハし以て世の開進を計ふんにハ啻に束髮のみならず何事にてもなし得られざるのことやあるこれを本を務むとハ云ふなり

◎中外新報

○皇后宮　皇后宮にハ去る九日午前九時三十分の御出門にて皇居御造營場へ行啓あらせられたり

○御式年祭　去八日ハ三品薫子内親王尊の御式年祭を執行あらせられ　聖上にハ西四辻侍從を皇太后宮よハ吉見權掌侍を皇后宮にハ小池權掌侍を御代拜として小石川豊嶋が岡なる御陵墓へ差遣ハされしやに承ハる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

〇學校生徒氣質鍛錬（前號續）

	舍監 120															
四年生	組長 29				組長 29				副組長 28				組長 29			
三年生	什長 14		什長 13		什長 14		什長 13		什長 13		什長 13		什長 13		什長 14	
二年生	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長	伍長
一年生三十八人 四年生二十五人三年生二十二人二年生二十四人ヲ加フ	學友六人	學友六人	學友六人	學友五人	學友六人	學友六人	學友六人	學友五人	學友六人	學友五人	學友六人	學友五人	學友六人	學友五人	學友六人	學友六人
學友小別	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生一人三年生二人 二年生一人一年生一人	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生一人三年生二人 二年生一人一年生二人	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生一人三年生二人 一年生二人	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生一人	四年生一人三年生二人 二年生一人一年生二人	四年生一人三年生二人 一年生二人	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生一人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生二人三年生一人 二年生一人一年生二人	四年生一人三年生二人 二年生一人一年生二人

備考〇第一本表は生徒數を百二十八と假定するものなり但し舍監組長什長の下に「アラビヤ」文字を以て書せるものは其所部の人員を示すものなり〇第二生徒數百人及百四十人あるものは本表に準じ區分すべし但し學友の數に增減あるものとす〇第三生徒數百五十人以上百八十人あるものは組長六人を置き本表に準じて配分すべし〇第四生徒數二百人以上二百四十人あるものは組長八人を置き本表に準じて配分すべし〇第五副及び組長は四年生什長は三年生伍長は二年生とし三周間輪番を以て從事せしむ〇第六四年生三年生二年生にして非番のものは總て一年生の部に編入するものとす〇第七甲組より乙組等に變換するは適宜舍監の意見に據るべし

〇東京商業學校　全校にては今度其の生徒の帽子徽章を隷書の商の字に改められしと云ふ

〇府下小學生徒の洋服　府下の各公私立小學生徒は府廳よりの論達もありたることなれば追々に洋服に改たむる向き少からず就中麻布小學校にては貧窮にして差支ふるものへは一時學校にて繰替をき月賦にて辨納せしむることに協議整ひし由

〇學習院幹事の死去　學習院の幹事たりし正五位中村濟行氏は肺炎に罹りて死去せられ去三日本郷の麟祥院へ葬られたり

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

と云ふ

○華族女學校生徒　華族女學校の生徒は去る六日一同濱離宮の拜觀を差許され御苑內なる御茶屋に於て茶菓を賜られぬ

○東京府師範學校　仝校にては明後日頃より入校試驗を執行せられ又近々科目中に英學の一科をも加らるゝ筈なりと云ふ

○奴婢解放令　從來朝鮮國に於ては奴婢を賣買し甚だしきは奴婢を世傳せしむるの弊習ありしが韓曆本年正月三日（即ち我が二月六日）に於て國王より斷然奴婢解放の敎諭を下し公賤（公賤とは即ち刑に觸れ官に沒入せらるゝものを云ふ）私賤（私賤とは相互契約して賣買するものを云ふ）皆其身に限り其子孫に及ばずと改定せり其沒入の輕重賣買の制限及び贖賠の方法等一切節目立案は漢城府尹に命ぜられたると當時已に內外の新聞紙に詳かなり漢城旬報第十三號に其節目を揭たれば即左に抄錄すと去四日の官報仁川領事館報告に見ゆ　一自賣の奴婢及び世傳の奴婢は只一身に止りて世役せるを得ず　一自賣奴婢の子孫は賣買するを得ず　一世傳奴婢にして既に使役するものは只其身に止る然れども若し其子孫にして依托せる所なく自ら使役を願ふものは新買の例を以て更に價を給す　一自賣奴婢は一日使役すと雖も名文既に定ることなれば輕免すべからず故に家主贖を許るすの前には贖を請ふことを得ず　一使役は只一身に止り世役せしめざれは其買ふ所の錢も一身に止り死後其子孫に追徵するを得ず　一若干錢米の宿債を以て良を壓えて賤となすを嚴禁す　一奴婢の子孫自ら賤を免かるゝを賴み其分限を越え法紀を犯すものは各別に嚴懲すべし是の如く定式の後は大小人民を論ぜず復前轍を踏み朝令に違越するものは即時摘發し法に照し勘處すべし

○高等師範學校　仝校にては改革後陸軍士官學校の制に倣ひ生徒の起臥喫飯及び敎塲出入等頗る嚴重にせられたるよし

○結婚　德川達孝伯（田安家）にはこの程靜岡なる慶喜公の二女鏡子（十四才）の方と結婚の約を整へられしよしまことに芽出度かんことにてぞありける

○外國敎師雇入　東京職工學校にては今度佛國の美術化學士ウヰツ氏を雇入らるゝ由にて右は彫刻幷びに化學の敎師に充らるゝ都合なりと聞く

○踏舞會　來る廿日は英伊兩國の公使が發企にて內外貴顯の夫人令孃方を鹿鳴館に招待し盛んなる踏舞會を催さるゝ由

○帝國大學総長　仝總長は此の程野州足利の織物講習所へ出張せられ一泊して翌日直に歸京せられしよし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○遊戯會　三田の慶應義塾にて去る六日催されし處の遊戯會ハ中々の盛會にて勝を得たる生徒へハ福澤氏の夫人幷に令孃より夫々賞與を與へられ來觀人ハ紳士貴婦人を合せて殆んど千人ばかりにも及びたりと

○試驗賞與　駒場農學校に於て此程定期試驗執行の際學術優等の者をば夫れ〳〵賞與されしが其賞與を得たるハ岡田鴻三郎氏外十三名の人々なりしと云へり

○婚姻市場　我が國にも京都にて市中の未た嫁せさる女が今日を晴れと衣飾ていつやらん知恩院に詣づることとなるがこれも先づ云へば婚姻の市場ともまうすべきか去る二日發兌の時事新報に遠くルーマニヤ國にてこれに似て尙ほ奇なる一婚姻法あることを記載したり乃ち全國カーパシヤンス地方の西部に住める人民ハ毎年セントポールセントピータルの祭日にガイナ山とて高さ五千尺乃至六千尺程ある山の頂上にて市場を開き其地方にて年頃になり婚嫁すべき女子ハ皆其の兩親に伴ハれて此處に集り未婚の男子の採擇を待ちて婚姻の約束を結ぶの習ひにて例年此の開市の前にハ未婚の女子ある家にてハ娘の母伯叔母祖とうを初め親族朋友の婦人等より夫々財物を贈りて結納物を助け其等の用意整へば結納物をば手奇麗に拵へたる皮櫃に入れ花を以て之を飾り之を其家の最良の馬に負はせ又家畜其他總て世帶に要用なる品々をも結納物につけて兩親が其宰領となり娘と共に市場に送る偖市場に到れば諸方より集りたる者が一家族毎に別々に天幕を張りて其中に件の結納物を所狹きまで陳列し見物の男子の入來るを待つ男子の方も此日を晴と銘々及ぶ丈の綺羅を着飾り是亦兩親の同道にて此處に來り巡次に隅なく各天幕を見廻り其中にて目に留りたる娘を選び定め其場にて直に表向結納の儀式を執行せる法なりといふ尤も結婚の約束ハ前方より整へあるもの多き由なれども是非一度ハ此儀式を行ハざるべからず又女子の方にても豫じめ結婚の約束あるハ最も好む所なれども其地方の儀式なればパ矢張他人同樣市場に出てゝ衆人の見物にかゝるを常とするなりと奇妙なる風習もあればあるものかな

◎學藝叢談

○カリー氏幼兒敎育學

〔第九節〕外物に對し腦の活動如何　腦は二樣に活動くものにて一は体動一と心の自動とす体動とハ全体に通徹り居る神經系を通じ外誘を心に導くの活動なり神經には各々別々に受

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

け持ちの作用ありて眼より内部につゞくを視神經といひ物を見るの作用をなし耳よりつゞくものは聞くことを作用らきその他全體の外部何れのところに觸るゝも直ちにこれを感ずるところの神經等みな外誘を腦に導くの作用をなすものにて畫を見音を聞きあるひは物に觸るゝことある每に必らずその作用を起すものなりこの諸神經の活動は外より刺衝するものゝ力らによりその作用の度を異にするものなるが故によく〳〵氣を附けてこれを保護せざるべからず嬰兒の腦の幼稚なる時にありては強き火の光輝りは視神經を損し急に大聲を聞くは耳の神經を害するものなり譬へば嬰稺學校に於て小兒の顔に羞明きほどに明りを向けまたは教師の粗らく〳〵しき聲をなすの或は小兒の大勢集まりて騒がしきなどの不順序のことあらば腦の不安なるより疲勞を起し腦の發育に必要なる靜穩を欠き遂には腦の焮衝を起すことありこれ體育上のことのみならず徳育上に於てもまたその影響を及ぼすこと少なからずこのことは誰しも幼兒教育の際等閑に考ふるを以て特にこゝに説明するものなり實に幼稚なるときにありては体育と徳育とを別々に考へなすこと能はず怒らしめあるひは恐怖せしむることは諸神經を焮衝して遂に腦に及ぼすがゆゑに惡性および壓制の主義を以て教育するは小兒の体育徳育の双方に於てその罪輕るきにあらざるなり(以下次號)

○理學一斑

〔第六節〕人爲物とは即ち天然物にして唯人の之を形造くり或は離合したるのみと云ふ事

「天然」と「技術」および「天然物」と「人爲物」との區別をなすは容易簡短なることなりと雖ども何事何物にかぎらず畢竟するところは皆これ天然に歸するを覺悟せざるを得ず常に我々が人の爲りたるものなりと云ふ人爲物も本是れ天然物にしてたゞ人の力らを以てこれを形ちづくり之を動かしたりといふに過ぎざるなりまた「造る」と云ふ意味を尋ぬるときは以前より或る他の形にて世に存在せしものゝなかりせば人力もまた何事何物をかなし得べき夫れのみならず彼の人が天然物を以て形づくり或はこれを離合して造り爲せしところのものはみな人の所有する天然物たる「力」に依て造り出だせしなり

されば人爲物は總て人間と名づくる天然の一部の働らきに依て生じたるものに外ならず

爰に箱を造るとは釘を以て板を合して形造くるものなりと云へばその木も鐵もみな天然物たるのみ時計は金或ひはその他

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

◎英語の栞　附録　馬字ばなし

○泰西箴諺の直譯

（甲）㊀譌りの㊁評判（と）㊂急行驛馬（に）㊃乘る

（乙）㊀少し㊁我れを㊂愛せよ㊃而て㊄長く㊅我を㊆愛せよ

の金屬、砂石、紅寶石等の天然物を集めて種々の形ちに造り衣服は毛、綿、あるひは絹糸等の天然物を以て造ることなり夫れのみならず斯のごとき諸物品を製造する人もまた天然物たるを免かれず

大工、建築家、靴製造人その他の諸細工人畫工等の諸物品を形ちづくり或ひは取り集めなぞするには皆天然物の力および性質を能く知り所謂天然なる原因と結果との鎖りの續き合を明らかにしたるのち人の用に立つものを造り出す事なり

大工が椅子を作るとせよ幾分の水の性質およびその力を知らずでは能はず鍛冶工もまた鐵に赤熱を與へて軟らかくなす時は槌を以て容易く形ち造り得らるゝの性質なることを知らずては一切の鉄細工をなし能はずして煉瓦師は黃土の性質を能く知り鉛匠は鉛の柔軟にして中和の熱度にて熔解する性質なることを知らずてはその仕事をなし得ざるなり

されば技術といふ技術はこの自然の原因と結果の知識を要することにて技術の進歩は實に天然物の性質と力との學問に依るなり如何にして諸事物の性質または力およびその原因と結果との關係を轉じ我々の利用に供すべきかを發明することにてこの學問愈々深ければその進歩愈々大なり

（未完）

MAXIMS & PROVERBS.

泰西の箴諺

（甲）　A false report rides post.

㊀ ㊁ ㊃ ㊂

〔意譯〕　流言は驛馬に乘る

（乙）　Love me little, and love me long

㊂ ㊁ ㊀ ㊃ ㊆ ㊅ ㊄

〔意譯〕　愛する事少しと雖へども永くあれ

MAKOTONO JŌZU.

Aperusu to ieru nadakaki e-kaki arikeri. Aru toki bijin no e wo kakitaru tokoro ye, kutuya kitarite, sono kutu yorosikarazu to iikeru nizo tadatini sono iū ga gotoku ni naositari; mata sitateya kitarite kimono no koto wo iikeru nizo, mata sono iū ga gotoku ni naositari. Ato nite desi ga Aperusu ni mukai: "sensei wa e no jōzu naru ni nanitote iti-iti hito no iū koto wo motii tamaisi zo"! totoikereba, Apersu kotaete: "sono miti no hito no iū koto wo motiuru koso makoto no jozu nare" toiisi tozo.

四百十一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◎列女傳

○英王妃ヒリッパ　（表書傳）

英國王エドワード三世の妃にしてヒリッパと申せしハ其の容顔の麗艶なること宛から雨に泣く海棠ならずば露に咽ぶ薔薇の如く夫が上婦徳もまた尋常ならず美ハしかりしかば王の寵愛一方ならず其の佛國と戰ひてカライス府城を圍まれし折も非常の長陣にて殆んど一年あまりにも及びければ從ひて陣中にありし佛國方にてハ永くも圍れて力盡き謀窮り兵粮も亦續かずして鼠さへ喰盡すに至りたれば詮方なく一同降參の事を協議せりされども英王の怒に遭ハんことを恐れて誰しも我れ其の使とならんと云ふ者なかりし處にアラスタストサソトヒールと云へる老人滿座の中に進み出て我れ死を決して能く其使たらんと呼ハりければ其の中の長老たる者五人天晴なりと稱贊し自分等も從ハんとて倶々英王の陣に到り城門の鎖鑰を獻じて哀を請ひけるが果して英王ハ降參するとの晩かりしを譲めて悉く斬らんと怒られたり然るに王妃ヒリッパは其手に縋り涙を流して死を宥されんことを請ハれたれば流石の王も怒を鎭め遂に百千の敵に死を宥して放ち遣りしかば其敵共ハ妃を生命の主と崇め尊み世間の者も亦偏に其の善行を感じたりと云へり國母とも稱せらるゝ人ハ實に斯こそありたけれ

○節婦阿辰　奥州　漁婦寄稿

親に孝ならんと欲すれば夫に貞ならず夫に貞ならんと欲すれば親に孝ならず進退茲に谷りて遂に刄に附しける一貞女あり今其事跡を訪ぬるに頃ハ正徳の昔し仙台志田郡阪本村に鈴木八五郎とて強慾無殘の惡徒あり夫婦の中に一女を擧け名を辰と呼びて掌の玉翳の花と愛育しみハや十七年の星霜を送りけるが辰ハ長ずるに及びて益ゝ艶かに其心性さへ親に似ずしていと美しかりしかバ近村より八太夫と云へるを養子に迎へ辰の夫と定めたるに夫婦の間至て睦く翌年巳に一子を擧けぬ然るに父八五郎ハ辰の夫に仕ふるの貞なるを嫉み且つハ強慾の者なれバ婿を去りて辰を貨にせんと計算し一日辰を膝下に招きて八太夫ハ其血脈甚だ宜しからず他ハ癩病ある家なりと聞けば早く離別して此家に餘毒を遺さぬ樣致さんと欲す你の意ハ如何ぞやと問ければ辰ハ涙に咽びながら仰然ることにハ候へども一旦偕老の契を締び夫と定めたる上からハ今更血脈の惡とて離別するに忍ばねば天より我に降さるゝ禍なりと諦めなん況て子もあるとなればこればつかりハ聽し玉へ若し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

聴されずば自害せんと決心したる答ぶりに父も二の句を續ぎ難く其日は理に伏して空しく止めたるも固と無殘の悪徒なればまたもや悪念を萌し來り一夜暴風瓦を飛し大雨篠を衝くの折に乗じ竊に隣家の土藏に忍び入りて貯たる米穀を盗み其の餘粒を土藏より婿八太夫の室に至る途中に播散したれば翌日に至る隣家は盗賊ありしとて騒動一方ならず頓て餘粒の落たる跡を尋て八五郎の家に至る折から八五郎は出來りて其盗賊は正しく我婿ならめ斯々の證憑ありとて自ら進んで官に訴へければ憐むべし清浄潔白なる八太夫も捕られて數日獄に繋れ嚴き拷問を受たるが固より冤罪なれば白状すべき謂れなく何事も知らぬと答ふるより外わらざれば辰を召して訊ねられんとするに辰は哀さ愁さ云はん方なく父の悪事に從ひて夫に罪ありと云はゞ孝道は缺ざるも知らねど寃罪の夫を戮して貞節の心を失ひ夫の爲めに云開らば父を罪す所詮我身を殺すに如ずと小児を背負て川に投せんとせしも人に妨げられて果さず家に歸りて僮を故意酒屋に奔せ其隙に死せんとすれば生憎捕卒來りて引立んと云ふにぞ懇に暫時の猶豫を乞ひ室に入りて遺書を認め小児を刺殺して其身も刄に俯せり實に正徳四年四月十四日の事にて辰は享年廿七才なりしされば當時の國君伊達吉村公は爲に父の死罪一等を減じ夫は無論放免して母に終身一人口を賜ひ同村天性寺に碑を建て永く其貞節を旌表されしとなん辰の如きは能く其死處を得たるものと謂ふべし

○妙融尼の歌才

元祿年間播州網干の里に一の小かなる庵を結びて遁世したる尼妙融と云へるは元と丹波柏原山里の人にて田氏捨女と呼べり生れながらにしていと慧敏く名譽の歌人にてぞありける其の六才の時の句に

雪の朝二の字二の字のげたのあと

と謂ふ秀吟あり都鄙に傳聞せしかば或る搢紳家の耳にも入り召れて「かや原にをしやすてをく露のたま」の句を賜はりしとなん稍長ずるに及て季吟の弟子となり和歌を學び居りしがいまだ三十才にも滿ず不幸にして夫を喪ひたれば僧盤桂の門に入りて髮を截り尼となれり其の時の詠歌に

秋風のふきくるのふにいとやなきこゝろ細くも散る夕かな

其後元祿年中網干の里の庵に於て六十五才を以て歿りしとぞ

○樵夫の妻が勇氣

いつの頃にてやありけん其の年を忘れたるが京都東蹴上の邊に樵夫の七兵衛となん云へるものあり或日木を伐らんとて山

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

深く分け入りしに只有る崖の下にて一尾の巨蛇に出遭ひ遂に其の為めに呑れたりしかば其の妻といつになく家に歸ることの後れたるよりいたく心配なし迎ひにとて豫て山路ハ心得たることなれば一柄の鎌を腰にして出往きけるに心當りの處にも更に其影見えざれバ這ハ深くも分入りて何か變事に出會しならんと我知らず攀躋れば溪ハ落葉に降埋れて音ハすれども水を見ず鳥ハ古巣を出往きけん聲稀にして影遠かり半腹の樵路に草葉を結びかけたるハこれ誰がせし栞ぞ嵯峨たる山峽に木枝を伐り倒しあるハ正しく夫のなせし業ならんと其處等あたりを見廻せば夫の枝と柴荷とありて其人ハいづ地往けん影だに見えねば殆んど魂も身につかず隈

四百十四

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

なく捜す折まそわれ崖の上にすさまじき音の聞えければ仰見るに一尾の巨蛇眼は百錬の鏡を二つかけたるが如く體は四斗樽數箇を聯ぬるに似て紅の舌を火焰の如くに吐出し夫を餌に充て其味を占めたるにやあらんと思はれて今又首を低れむかひ來るよしありければ妻は疾く腰なる鎌を拔取りて己れ夫の讐ござんなれと立むかひ呑れざまに其鎌をもて巨蛇の腮よ押當たれば截裂て腹に至り苦て蜿蜒まはるはづみに地に墮されけり夫も其腹に在しと覺えて仝じく其處に墮てありされば讐を打ふせし上夫迄助けたるとなれは妻の欣び大方ならず直に肩に扶けて家に歸り厚く療養なしたるにぞ不思議に生命を拾ひ得たるも毒に感じて鬚髮も夫婦ながら悉く脫落宛ら藥罐の如くになりたれば人皆なこれを藥罐七兵衛とは呼び做せりこれよりして七兵衛も樵の業を罷めて專ら農業を務め斯ゝる目に遭たれどもいと長壽を保ちたるはこれ偏に妻か勇氣の賜にてぞありける

○和書講義

つれづれ草　　橘道守述

第十四段　第三節

貫之か。糸による物ならなくにといへるは。古今集の中の。歌くづとかや。いひ傳へたれど。今の世の人のよみぬべき。事からとは見えず。其世の歌には。姿。言葉このたぐひのみ多し。此歌に限りて。かくいひたてられたるも。知がたし。源氏物語には。物とはなしよとぞかける。新古今には。殘る松さへ嶺にさびしきと。いへる歌をぞ。いふなるは。誠にすこしくだけたる。姿にもや見ゆらん。されど。此歌も衆議判の時。よろしきよし沙汰ありて。後より。殊更に感し仰下されけるよし。家長か日記にかけり

〔大旨〕此一節は。前を受て。今の歌の古へに及ばざるを證し。又中古といへども猶今に優れるをいへり。

〔語譯〕貫之　紀望行の子○糸による云々　古今集羇旅部に。糸によるものならなくに別路の心細くもれもはゆる哉。とある此歌なり。古今集は。醍醐天皇。延喜年間に貫之。友則。躬恒。忠岑等勅を奉て撰進す。二十卷あり。○源氏物語には云々　源氏物語。總角の卷。宇治のばそくの宮の。一周忌の所に。物とはなしよとか。貫之

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

が。此世ながらの別れをだに。心細きすぢに。引かけゝんをとあり。源氏物語。五十四巻ハ。紫式部の作なり。此人の傳ハ。本誌第十五號にあり。見合すへし○新古今にハ云々　祝部成仲の歌に。冬の來て山もあらはに木葉ふり殘る松さへ峰に淋しきとある歌なり。新古今集ハ。後鳥羽院の院宣により。通具。有家。定家。家隆等。元久二年に選進そ。○衆議判　歌合の時。一座の作者批判して。善惡を決そるをいふ。

〔講解〕紀貫之朝臣がよまれたる。糸による物ならなくにの歌をば。古今集の中の。歌くづといひ傳へたれど。中々今の世の人の。思ひ付べき趣向とも見えず。其上。古今集時代にハ。歌のよそぶり。詞の使ひかた。これと同しやうなるが多き中に。此歌一首を拔出して。歌くづといひはやされたるにハ。必ず其故あるべきに。今となりてハ。其故だに知り得る人のなきハ。　今の古に及ばさる故なるべし。倩 思に。紫式部が。源氏物語に。物とハなしにと。改めて引れたるを見れハ若ハ。物ならなくにの句の。あしきに依て。かくハいはれたるものの。又新古今集にてハ。殘る松さへの歌をば。歌くづといへり。是ハ誠に。上句のくだ〳〵しき故かと。今の世よりも見定めらるれど。さりながら。此歌も。衆議判にて。宜敷よし沙汰あり。其後又。後鳥羽院の叡感にもあづかりたるよし。源 家長朝臣の。日記にあり。之によりて思へバ。今の歌ハ。只古へに劣れるのミならず。新古今時代にも。及ざるなるべしとの意也。

◎稗史小說

○英國小說剪燈情話　第二回

小佳人憐得良偶　寒敎師苦纒戀情

非利ハ排士の語を聽きて事の發露れんとを怕るゝの色あり時に排士ハ嘻々と打笑つて云る樣這の密事を與かり知りて居ながら世間に少しも吹聽せざるハ實に通常の人物にハ出來ざることなり但し此の鄕人ハ愚にして且つ聾とも申すべき者共なれば吹聽せしとて數日の後にハ乾々浄々忘れてしまふべければ君またこれを心になかけ給ひそと語次遂に佳人の事に及びて曰らく今既に愛閨の玉顔を拜し奉つることを得たるが斯く申さば諒めて人を評するに似て失敬なる者と思ハるべけれど實に絕世の佳麗花にして語を解し無類の別品玉にして香を含

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

むこゝに至りて始めて君の危険を凌ぎ禮儀を留してこの拙策に出たることを怪みたるの心消散したり誠に以て莫大の艶福と云ふべしとて排士ハ自ら其の孤苦零丁を歎じ天寒く夜静かなるの時に當りてハ孤衾氷の如く冷かに寒燈豆の如く大なるも竟に閨の伴侶ありてこの寂寥を解くに由なきを思ひ覺えず潸然として涙を流せしが非利ハ今其の語を聽きて且つ曰ふやら君の見る所ろハ啻に容貌の美麗なると態度の嬌艶なるとに過ぎざれども升ハ先づ次にして他の心思ハ至つて賢淑に他の見識ハ頗ぶる高明なり斯く申さば我が妻を賞るに似たれど我れこれまで世間無數の女子を看過したれども竟に一人の容貌なり態度なり心思見識他に超るものあるを見出さゞりき併しながら假令其の他人に優れたるを見受るも我妻となそことに至りてハ畢竟君の大なる御盡力によりて成就したれば之が報酬ハ我れ豈に圖ふずして已ぎなんや幸ひに我が家伯の處ろに一の大教堂あり教師ハ年已に老て世を謝するをも久しからざるべければ我れ保證人となりて君を推擧し其の後任に當るを得せしめん其教堂ハ俸祿も頗る多ければ隨つて懷ろも寛裕ならるべし然りし後より我れまた君の爲めに一個の窈窕嬋妍たる美人を選みて琴瑟を諧へてん我が今日の奇遇の如きも豈にまた君の身に期そべからざるのことあらんやと排士ハ云ふ極めて君の美意を承り但忘る余の如き福薄運蹇の人ハ死ても左樣なる幸福ハ受け得ざらんとをと聞く非利ハ種々に慰さめ遂に車を命じて此程し家に回り去んとする時忽ち人あり進み來りて一言以て主人に稟請すべきことありと曰ふ知らずこれ如何なる人ぞ次號に於て自から知らん

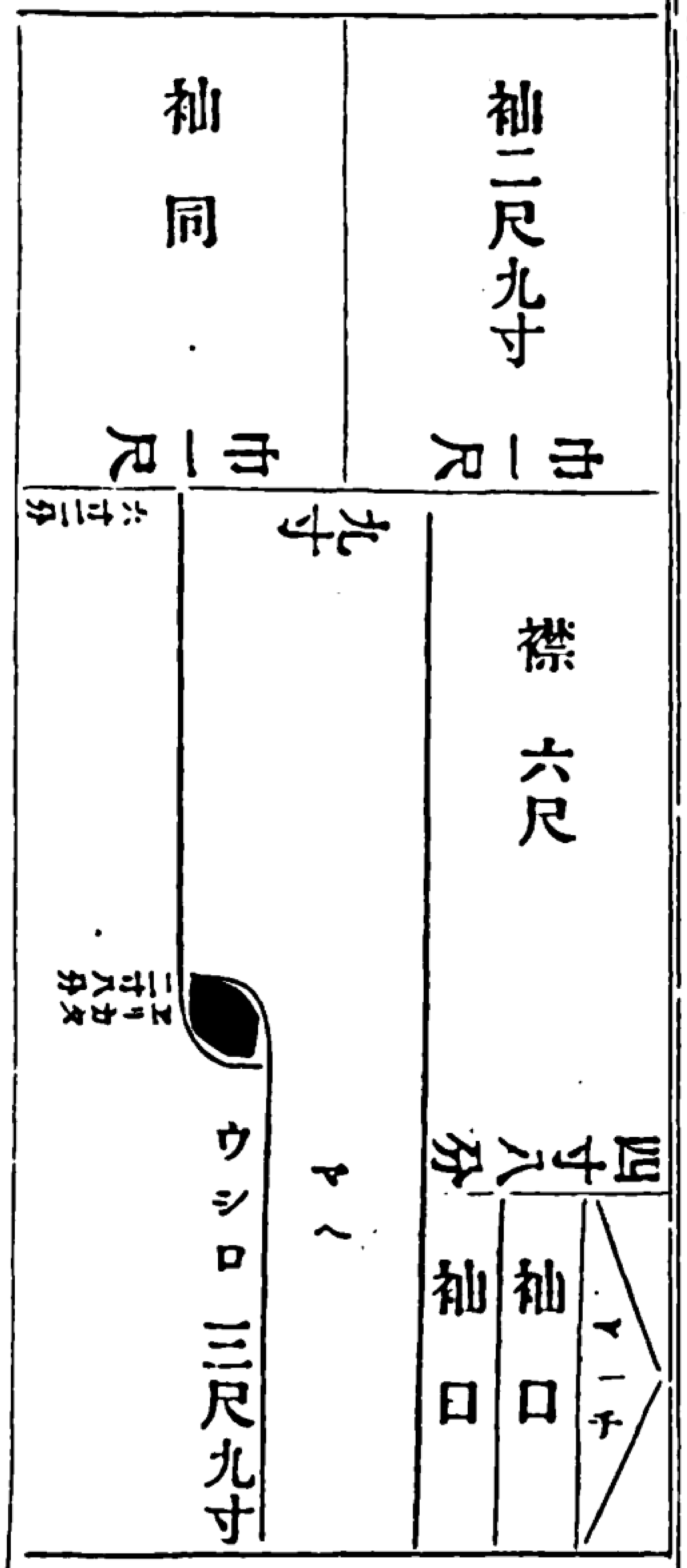
◎女紅

○裁縫 男物幷女物仕立揚寸法及び二尺巾折返男羽織裁方

男物仕立揚の寸法ハ丈三尺九寸五分うしろ八寸前身七寸肩巾八寸五分だき六寸身あき一尺四寸衽巾四寸だき下六寸五分あひづま三寸五分衽下り五寸袖丈一尺四寸褄下一尺八寸袖口八寸袖巾九寸襟丈二尺四寸襟巾三寸二分女物ハ丈三尺九寸五分うしろ七寸五分まへ身六寸袖つけ八寸袖丈一尺四寸袖口六寸五分袖巾八寸五分だき五寸五分だき下五寸七分五厘身のあき一尺五分肩巾八寸衽巾四寸衽下り五寸あいつま三寸五分つま下一尺八寸襟丈二尺四寸襟巾三寸二分なり

二尺巾折返男羽織一丈一尺物の裁方ハ丈二尺五寸袖一尺四寸五分襟六尺にて圖ハ左の如し

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY



○日本調理用具目録

日本調理に用ゆる諸器具の目を擧れば大略左の如し婦女子たるものは心得置くべき事なり

庖丁　魚箸・魚板　薄刃　膳　和卓　椀　盒具　盆　鉢
皿　盃　各盞　壺皿　平皿　丼　猪口　湯續　重箱　提盒
盒子　掘子　銚子　提子　杓子　笊籬　食籠　飯匙　飯櫃
匙笥　行器　金色　懸盤　入子　緣高　水嚢　榴木　雷盆
味醬漉　臺　三方　木具　脚打　塗箸　小角　楪子

以上は本式往昔より用ゐ來りしものにて今日は已に廢れたるものも多かるべし

○炭火の爆るを止る法

炭火の爆るは危險なるものにて働すれば眼を痛めるとわり依にいふく爆る時は鹽を少しばかり火中に投すれば爆るとなし

○蠅を去る法

追々悪疫流行の季節に向へば第一に食物を用心するが肝要なり其食物には蠅といふもの多く集たがれば之れを去るには陳き茶の粉を火に入れて烟となせば逃去ると妙なり

○皮膚を白くする法

毎晩臥らんとする時雲花菜を擂盒にて能く擂り卵の蛋白少量を加へ水にてときて顔又は手くび等よ塗ること怠たらされば皮膚必らずしも白くあらずと云ふとなし請ふ試一試われ

◎御伽草

○酒の上の取組合

早竹虎吉は險竿兒の最も妙を極めたるものなるが先年歐米諸國に渡航して其技を賣りたる時倫敦に於て興行主より何の非常の喝采を得るほどの絶技を演じ呉れよとの注文に虎吉は種々工夫を疑らせしうへ疊二枚敷くらゐの豆腐をこしらへさせ其が上に乘りて獨り相撲をとりたりしのば見物人はもとより興行主もさそがは日本第一の險竿兒ほどわりて觸らば忽まち崩れんとする豆腐の上にて力瘤を入れヒヾを踏み曳やと立上りて飛だり跳たりするはまた絶妙の技なりと賞めざるものはあらざりしが虎吉はいと誇りがよこれ等の人に向ひ口上なも

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

つて申立つるやう見物の諸君よ諸君は今私の演したる技を見て絶妙の樣に賞められしが斯樣なる技はまだ〳〵おろかのこと本國にては險竿兒にあらぬ者が酒の上にて取組合を始めることありと皆々聞て吃驚せしは最も千万

評英人吃驚是非驚其妙技驚其野蠻也世間嗜酒之徒豈不戒而可哉可戒可戒

○考へ物二題　　深川　木場ゆきえ投

三字名のものにて或は草花の名ともなり或は洋服に必要ある具ともなるものあり何なるや

東山道の國名にて之れを逆さに讀めばこのごろ出來たる處の人間を惱やます一小虫の名となるものあり其國名は如何

○第廿四號西洋隱語解當者は左の如し(たこ)西京山科田鶴姐伊勢櫛田元姐芝長野春姐番町堀光姐本所山下兼姐○廿三號西洋隱語及謎(電線)(暮まへから飾りまつ)筑後本村槻姐新潟淺香歲姐

◎古今雜話

○西洋女禮一斑

〔第二、訪問、早問および名刺の事〕　友人を訪ふに早問と云へるは冬なれば二時より四時まで夏なれば二時より五時までの間になすべしされば中餐の片附かざる前に推參して妨げをなすの憂ひなくまた晩食前にその家の婦人の扮粧の爲めに一二時間の餘暇を得せしむるの便利あり

早問をなそには人の中餐中を愼んで避くべし時として婦人は小供等と共に一時半ごろに食事をなすが故にいまだ來客に接するの用意なきものなり若し誤て一度この時間内に人を訪問することありしならば決して再びすることあるべからずこれ等のことは瑣細なることなれども教育の屆きたる人は常に等閑にせざる事なり

儀式上の訪問には長坐することあるべからず萬一談話興に入ることあるもよく〳〵注意して半時間を超ゆべからず常にその家の人をして倦怠を生せしむるよりは歸りを惜ましむることこそ優しからめ

(以下次號)

○床盃

今時婚禮の夜床盃と名付て夫婦ねやに入て盃を取かはし酒のむに法式あるやうに云ふ然れども古はなき事にて當世のはやりことなりねやにて打とけて夫婦酒のむ事に法式はなし寢ながら酒など飲むとは下々の賤き者などは左樣の不行儀なる事をするなりよき人などはせぬとなりと貞丈が雜記に見ゆ

○日本女禮のあらまし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

起居進退の部つゞき

（人前を通過する禮）貴人の前を通る時には二三尺手前にて貴人の方なる膝より跪づきて少し貴人の方をうかゞひ一拜す尤も正しく手膝を引て拜するには及ばす起つ時も手膝を引くに及ばず少し下座へひねりて起ちざまに貴人の方なる手を膝の下まで下し裾の返らぬ樣にさへて腰を屈め通り過て後常の如く歩むべし尚敬ふ時は貴人の方へ斜めに居向て跪くへし平人の前は其の座の方の膝ばかり突て聊か會釋して通る者なり

（貴人の側近く出る禮）貴人の側近くへ出るには閾際まて平伏し此方へと申さるゝ時二膝三膝進み出てまた拜すべし而して進む時手は左右一同に進め膝は左右と摺出るなり猶近くとある時は左手と右膝と一同に出て次に右手と左膝とを出し交る〳〵摺寄るべし退く時も出る時の如く手膝を打かへて滯りなく罷り入るべし

（行逢ふ時の禮）上輩へ行逢ふ時は疾く左へ避け斜めに扣へ居て兩手を膝の下迄下し腰を屈めて行き過ぎたる後歩み出べし又同輩ならば互に左の方に避けて斜めに向き合ひ兩手を膝頭迄下し一禮して行違ふべし下輩へは立留り目遣ひして少し腰を屈め聊か會釋して行過ぐへし廊または椽類などにて行逢ふ時も惣て同樣心得べし

（戸障子開閉樣）先づ跪きて後右へ開んとする時には右手を引手にかけ少し開きし處を左手にて其障子又は戸の下を持ち能き程にあけて兩手をつき摺入るなり閉る時は上座の方を後ろにせぬ樣に居向き先づ右手にて下を持ちて引寄せ左手を引手にかけ押付け措くなり左へ開くも左右の手を異にするのみにて別に違ひなし

（以下次出）

◎群芳詞苑

○燕來　西京　上田重女

言の葉の花咲殿の軒に來てともにさへつるつくらめかな

○江村晩釣　西陵　江南魯生

坐石釣詩料。兒童何太喧。荷葉當蓑笠。幾來促晩餐。

評亦是不尋常釣客

○送山崎文吾子東遊　肥前　谷口老生

秋風吹別入征襟。離恨淺因學海深。行矣勿徒消日月。千金難換是分陰。

評山崎子其書諸紳可矣

○生駒晩望（田居小景記第五）河内　鐵心居士

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

吾盧東南群山屛立。高峯摩天。就中巍然聳秀者是爲生駒山。晩望之際。烟霞漠々。如有如無。實吾盧之奇觀也。

○漢宮詞　　秋山　玉山

舞態翩々當上開。相迎七寶避風臺。深宮月出簫聲起。女伴同歌赤鳳來

○苑蠡載西施圖　　朝川　善庵

定國忠臣傾國色。片帆共起五湖風。人間倚伏君休怪。呉越存亡一舸中

編者曰本號より軌範ともなるべき故人の詩一二首つゝを選びて登載すべし前二首乃ちこれなり

○閨秀新品

○春雨　　東京　溝口久子

春雨はいかなる色や含みけんのへのしとりをなへて染めぬる

○暮春鶯　　東京　樫村　瑛子

世の中よひとはのりのはくるゝ春をしむはおなし鶯のこゑ

○同じ題　　東京　熊谷　玉子

鶯のこゑもきふりて聞ゆるはるの暮るゝをおくるなるべし

○菜花　　備后　藤井惠美子

菜の花や胡蝶も狂ふ二つ三つ

菜の花のあせ道ゆくや十文字

○杜若　　東京　樫村　瑛子

我獨り夜明け顔なり杜若

杜若さすや子の子の二た七夜

花賣に寢顔見られぬかきつはた

○聞蛙　　下毛　竹江　女史

池上荷花白露滋。薰風拂摇碧梧垂。吟情尤好微凉動。閙々蛙聲催雨時

○第廿三號數學答式　　東京　富安　芳子　栃木　塙　竹子

$2=2$

$2=2$

$13\left\{\begin{array}{l}10\\11\\15\end{array}\right.\quad 3+2=5$

$2:16=2:x$

$2:16=5x:$

答　十一錢の品十六斤　十五錢の品四十斤

○新題

和歌(苗代水)　　俳句(余魚)

詩(二喬讀兵書圖)五七言律隨意　　文(嘲蚊文)和漢文隨意片假名交りは三百字を限る

數學題

九名の雇人足あり十週間半にして給金七百三十八圓と三十二分の九を得一人一週の給金幾何なるや

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

驛遞局認可

廣告

岩神正矣君編輯「ワシントン」「グランド」二氏石版肖像入

米國前大統領前同斷

虞蘭將軍全傳

平假名附洋綴美製全一冊定價卅五錢

○世間其形小にして貴重なる者あり寶玉是れ也此書小冊子と雖ども將軍が一生の經歷功業を羅述して簡にして要を得たり故に一たび出板して忽ち初板數千部を賣盡し未だ二月ならずして

再版

將軍が幼時、出身、浮沈、南北戰争の紀念、軍略、大統領の當撰、政略、失策、世界漫遊、將軍家の落魄並に逝葬式に至るまで將軍が自著中より抄出せる上は他の近代史にも參考して輯錄せる者なれば將軍の一代を知らんと欲せば之に加る寶玉なからん尚は初版に倍して愛顧を乞ふ

西森武城君編

●生徒必携

作文獨稽古

和製中本全一冊

定價貳拾貳錢

七條峰太郎君編輯

隨頭いろは分字類

●女子必携

女子作文楷梯

和製中本全一冊

定價貳拾貳錢

隨頭作文要用字類

從前小學校の生徒に文を敎ゆる男女一樣なるの爲めに不都合多きは敎育家の常に患ふる所也然れ共女子の爲め敎ゆる好書なきか爲めに只た患ふるのミにて之を濟ふ能はず

今此書は專ら女生徒よ婉曲にして通ず易き作文を敎へ男生徒一樣の不都合なきことを計る爲めよ編著せるものにて作文獨稽古と共に小學敎員及ひ生徒諸君の錦囊たる書なり

細圖入白紙摺美本

堀内正路著

○千家正流

茶の湯客の心得再版

全一冊

舊定價四拾錢

改正廉價金卅五錢

此書は千家直傳の免許を受たる堀内大人の新著にして先きよ出版致候處江湖の喝采を博し發賣致しし幸いに數千部を賣り盡し今般

再版

仕候へば苟も茶道を好むし諸君は一本を備へて千家の奧意を學ぶの捷徑に供し給ふべし

發兌 春陽堂

賣捌 九春文舍

教育每週新報

●第壹號六月廿日發兌壹部定價金三錢見本代金郵劵代用不苦

諸君澤山詩文ノ御投吟ヲ乞フ

發行所 東京本所區緑町壹丁目拾七番地

教育每週新報

發行所 東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地

積文舍

持主兼編輯人 松本義弘

印刷人 初鹿野鎌五郎

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地 大賣捌所 修正堂

同 神田區淡路町 同 巖々堂

同 神田區佐柄町廿一番地 同 東海堂

同 神田區雉子町 團々社

同 日本橋區新葭町 長明堂

同 牛込肴町十七番地 活神堂

同 芝區愛宕下町二丁目 高硯堂

同 蠣売町貳丁目 信文堂

同 本郷區本郷元富士町二番地 盛春堂關田

同 同本郷春木町貳丁目 解明堂

同 牛込區牛込神樂町 積善舍

大坂府備後町四丁目 岡嶋支店

千葉縣千葉本町一丁目 立眞舍

山梨縣甲府常盤町 内藤傳右工門

藝州廣嶋大手町一丁目 早速社

江州彥根西内大工町 新々堂

陸前國仙台大町四丁目 木村文助

越後國長岡裏壹之町 大橋書房

神奈川縣下横須賀旭町 大塚靜喜

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY